

ギリシア神話原語ワーク

素案 2:ホメーロス, 『イーリアス』, 20 巻 90 行

2020 年 8 月 1 日

1 はじめに

ギリシア神話原語ワークは、古典ギリシア語を学ぶためのものではありません。古典ギリシア語で読むことが、翻訳とはどう違うかを感じていただき、その違いを楽しんでいただくためのワークです。

ギリシア語を学ぼうとしたとき、少なくとも東京周辺であれば、大学の講義以外にもいくつかの選択肢があります。詳しい、正確な文法事項は、そういったところで学んでいただければと思います。

2 今回の課題文

今回は、『イーリアス』20 巻 90 行目の *στήσομαι* について見ていきたいと思います。

実は、参加している輪読会で、私がこの解釈に関してきちんと把握しておらず、せっかくの前半クライマックスをお膳立てする重要な箇所であるにもかかわらず、単調な読み方になって反省しきりな箇所でもあります。

2.1 原文の確認

Πριαμίδη, τί με ταῦτα καὶ οὐκ ἐθέλοντα κελεύεις,
ἀντία Πηλεΐωνος ὑπερθύμοιο μάχεσθαι;
οὐ μὲν γὰρ νῦν πρῶτα ποδώκεος ἄντ' Ἀχιλλῆος
στήσομαι, ἀλλ' ἤδη με καὶ ἄλλοτε δουρὶ φόβησεν 90
ἐξ Ἴδης, ὅτε βουδὶν ἐπήλυθεν ἡμετέρησι,
πέρσε δὲ Λυρνησσὸν καὶ Πήδασον· αὐτὰρ ἐμὲ Ζεὺς
εἰρύσαθ', ὅς μοι ἐπῶρσε μένος λαιψηρὰ τε τοῦνα.
ἦ κ' ἐδάμην ὑπὸ χερσὶν Ἀχιλλῆος καὶ Ἀθήνης,
ἦ οἱ πρόσθεν ἰοῦσα τίθει φάος ἠδ' ἐκέλευεν 95
ἔγχεϊ χαλκείῳ Λέλεγας καὶ Τρῶας ἐναίρειν.
τῷ οὐκ ἔστ' Ἀχιλλῆος ἐναντίον ἄνδρα μάχεσθαι·
αἰεὶ γὰρ πάρα εἷς γε θεῶν, ὃς λοιγὸν ἀμύνει.
καὶ δ' ἄλλως τοῦ γ' ἰθὺ βέλος πέτετ', οὐδ' ἀπολήγει
πρὶν χροὸς ἀνδρομέοιο διελθήμεν. εἰ δὲ θεός περ 100
ἴσον τείνειεν πολέμου τέλος, οὐ κε μάλα ῥέα
νικήσει', οὐδ' εἰ παγχάλκεος εὐχεται εἶναι.

2.2 日本語訳例

プリアモスの子よ、どうしてそんなに、望んでもいない私を、あの意気さかんなペーレウスの子と相對して、戦えなどとけしかけるのか。それというのも、あの足の速いアキレウスに面と向かって立とうにしても、今が最初ではないのだから。もう以前にも、あの男は槍を執って、私たちをイーダの山から追い払ったものだ、われわれの牛を襲いに来た折のことだが。そして彼は、リュルネーソスや、ペーダソスを攻略したのだ。しかしゼウスは、その折、私を護ってくださって、胸には勇気を奮い起させ、この膝もすはしっこくされた(ので助かったが)、さもなくばまったく、アキレウスやアテーネー女神の手にかかって、もうとっくに討たれていたことだろう。女神は彼の前に立って進んでゆかれて、彼に光を授け、青銅の槍を執って、レレゲス族やトロイアの者どもを殺してしまえと激励しておいでだった。

それゆえ、人間の身として、アキレウスに面と向かって戦うことは不可能なのだ、いつも誰か、神様がお一人、彼にはつき添っていて、禍いを防いでおやりになるものだから。まったく、それでなくてさえ、彼の槍はまっしぐらに飛び、人の肌えを、貫かなくてはやまないものだ。しかし、もし神様が、私らにも、戦さのけじめを公平につけてくださるものなら、けして彼だっても、そうやすやすとは勝てはすまいだろう。たとえ彼の総身が青銅でつくられているなど威張っていても。

(呉 茂一 訳)

85行目まで、プリアモスの子リュカーオンに身を変じたアポローン神がアイネイアースに語り掛けています。なぜ、アキレウスに向かって行かないのか。かつて、酒宴の席であれほどまでに高言していたというのに、と。これに対して、アイネイアースは87行目から答えています。

このとき *στήσομαι* の読み方でかなり印象が違ってくると思うのです。

3 これまでの話の流れ

これらの会話は、アキレウスがギリシア軍に復歸したのを見たトロイア勢の中での会話です。そうは語られていませんが、恐らくは、アキレウスの出現に浮足立っていたことでしょう。ここで少し、話の流れを整理してみましょう。

- アキレウスの武具と戦車を借りたパトロクロスが戦線に出るが、ヘクトールに討たれてしまう(第16歌)
- パトロクロスが来ていたアキレウスの武具はヘクトールに奪われるが、メネラーオスの活躍によってパトロクロスの遺骸はギリシア軍に持ち帰られる(第17歌)
- 親友の死を嘆くアキレウスは、ヘクトールを殺せば自らも戦場で死ぬ運命にあるとする母神テティスの言葉を聞いてもなおヘクトール打倒を強く願ったため、テティスはヘーパイストスに新しい武具を依頼する(第18歌)
- アキレウスはアガ멤noonと和解し、戦線に復歸していく(第19歌)
 - － パトロクロスの遺体から離れようとしないうアキレウスに、テティスが遺体をきちんと保存しておくことを約束する(1～39行)
 - － アキレウスは軍議を招集してアガ멤noonと和解し、ブリーセイイスがアキレウスの許へ戻って来る(40～304行)
 - － 戦いに逸るアキレウスは食事も摂ろうとせず、パトロクロスの死を嘆きながら戦いが

始まるのを待つ (305 ~ 337 行)

- ゼウスはアテーナー女神を促し、アキレウスに対して密かにネクタールとアムブロシアを流し込み、彼が飢餓に襲われないようにする。(338 ~ 356 行)
- ギリシア軍は身支度をはじめ、アキレウスも新しい武具を試し、戦車へと乗り込んでいく (357 ~ 403 行)
- アキレウスの軍馬クサントスはアキレウスの死の運命を予言するが、アキレウスのヘクトール打倒の決意は変わらない (404 ~ 424 行)
- アキレウスが姿を現し、アイネイアースがアキレウスに立ち向かいが窮地に陥り、アイネイアースはポセイドーンに救われる (第 20 歌)
 - ギリシア軍の様子を眺めながら、ゼウスはテティスとの約束が果たされたことを確認し、オリュムポスに神々を招集して、それぞれが支援したい軍勢につくようにと促す (1 ~ 30 行)
 - 神々はそれぞれ自分の支援する軍勢へと向かって行く (31 ~ 40 行)
 - 神々がそれぞれの軍勢の元へと着くと、ゼウスが雷鳴を轟かし、ポセイドーンは大地を揺るがすことで、戦いの始まりを宣言する (41 ~ 74 行)
 - ヘクトールを求めて突進するアキレウスを見て、プリアモスの子リュカーオンに身を変じたアポローン神は、アイネイアースにかつての酒宴での高言を思い出させ、アキレウスと戦うように促す (75 ~ 85 行)
 - アイネイアースはかつてのアキレウスとの戦いの様子を語り、戦いをためらうが、神々の加護にしてもお互いが同等であれば、一方的に負けることはないだろうとも語る (86 ~ 102 行) ← いまココ

4 90 行目の στήσομαι という形

στήσομαι は ἵστημι という動詞の変化形です。この語は「立てる」とか「立つ」といった意味を持っています。この語の語幹は στη- または στα- であるとされています。今回の話の中だけであれば、στη- です。

そして στήσομαι という語形は、困ったことに以下に示す二種類の形が同じなのです。

4.1 一人称/単数/未来/直説法/中動態

στη(語幹)+σ(時称接尾辞, 未来)+ο(語幹形成母音)+μαι(中動態/本時称/一人称/単数人称語尾) として解釈します。

4.2 一人称/単数/アオリスト/接続法/中動態

στη(語幹)+σ(時称接尾辞, アオリスト)+ο(語幹形成母音)+μαι(中動態/本時称/一人称/単数人称語尾) として解釈します。接続法では語幹形成母音が長音化して στήσωμαι のようになるのが普通ですが、韻文では韻律の要求によってこれを短いままにすることがあります。

4.3 中動態

中動態とは、多くの人にとっては聞きなれない名称だと思います。能動態や受動態ならともかく、中動態とは？

ザックリ言うと、その動作が自分自身に何等かの形で関わってくるような動作のありかたです。

主な用法としては

1. 再帰的、つまり自分自身が動作の直接目的となっている場合
2. 間接再帰的、「自分自身のために...する」という意味の場合
3. 相互的、「互いに...する」という意味の場合
4. 使役的、「自分のために...させる」という意味の場合

などがあります。

恐らくここでは、再帰的に自分自身を(アキレウスに対して)立たせる、というニュアンスだと思われます。

4.4 直説法と接続法

直説法(indicative)は動詞に関して特に制限のない記述をあらわします。

接続法(subjunctive)は一般に「仮定法」と訳されますが、なぜかギリシア語やラテン語では「接続法」と訳されます。ギリシア語では主文で現れる接続法に、特徴的なくつかの用法があります。

1. (一人称/複数の形で)提案や要請を表わすとき
2. (主に一人称/単数の形で)思案や熟慮を表わすとき
3. 否定辞μήを伴って、まだ行われていない行動を禁止する意味を表わすとき

他に、間接話法では主文の動詞の形によっては接続法が要求されることがあります。

接続法で表される動作は基本的に未来です。というか、過去の動作を表わすことがあるのは、直説法くらいなのですが。

4.5 未来とアオリスト

未来という時称は、少なくとも直説法においては、私たちが普通に未来の事象をイメージするときと同じことを表しています。今回注目している箇所では直説法/未来ですから、将来的に行うであろう動作のイメージが、話者にとって非常に明確であるという特徴があります。転じて、直説法/未来は話者の意志を反映していることがあります。

また、アオリストという時称は直説法では過去を表わすことがあり、時称の区分では副時称(過去のことを表わす時称の総称)に入りますが、接続法で表される動作は基本的に未来です。そのためか、アオリストは過去のことを表さず、動作態(一回きりなのか、反復しているのか、習慣的に行われているのか、その時点で動作が続いているのか等)を表し、語尾も本時称(現在および未来を表わす時称の総称)のものを使います。

希求法は?という問いに関しては、このワークの今回の目的から外れますので割愛します。

4.6 いったん、文法事項から離れて

以上のことは、ご自分で何かを調べてみたい方のための情報です。ワークの背景としては、こういう情報もあるのは確かですが、大事なことは、こういったことから、どんなことを感じることができるか、です。

今回のワークで最も注目しているのは、90行目に出て来たστήσομαιです。そのことに間違いはないのですが、今は、登場人物たちの意図や感じていることにどんな解釈がなりたちうるか、を見てみましょう。

それらを見た後に、再びστήσομαιの検討に戻ることになります。

5 アポローン神の真意

それにしても。アポローン神の真意はどこにあったのでしょうか。まるでアイネイアースは対ヘクトール戦の前座だとでも言いたげにも見えます。ある意味、非常にイヤミな性格に見えてしまうのです。

しかし本当にそうなののでしょうか。この後アイネイアースはアキレウスに押され、本来ギリシア方であるハズのポセイドーンが彼を助けます。そのとき神は

やれやれ意気のさかんなアイネイアースも気の毒に、まもなくペーレウスの子に討たれて、冥府^{よみじ}へ降りてゆくことだろう、遠矢を射るアポローン神のいうままになっているおかげで。馬鹿な男さ、何一つ無残な最期を防いではくれないのに。だが、どうして今、この男が、罪もないのに苦難にあうわけがあるのだ。他人の嘆きのために、用もないのに、そのうえ彼は、広大な天をおさめる神々に、いつも嘉納をうける供物を献げてきたというのだ。さればさあ、私たちが、あの男を死の手から救い出してやろうではないか。クロノスの御子(ゼウス)さえも、あるいは立腹されるかもしれないからな、もしアキレウスが、この男を殺してしまったら。それに彼は、死なないですむことに、定業^{さだめ}できまっているのだ、ダルダノスの血統に後継がなくなって、絶え失せることがないように。クロノスの子は、このダルダノスを、自身と、やがて死ぬはずの人間の女たちとの間に生まれたすべての子供たちの中でも、とりわけ寵愛していたからだ。そいにもうとうからゼウスは、プリアモスの家系の者を憎んでいたから、今からは勇ましいアイネイアースが、トロイアの君主^{きみ}になることだろう、また後世に生まれて来るその子孫たちが
(呉 茂一 訳)

つまり、アイネイアースはトロイア戦争で死ぬ運命ではない、と言って彼を助けます。ロクシアースの異名をとり、預言の神でもあるアポローンが、アイネイアースがトロイア戦争では死なないということを知らないハズはありません。だとしたら、アポローン神は、アイネイアースが死ぬはずもないと思って、ヘクトールの準備ができるまでの時間稼ぎに使ったのでしょうか。

他に可能性はないのでしょうか。例えばゼウスはアキレウスがギリシア軍に復帰したのをみて、神々を招集したとき

もしアキレウスが、たとえ一人でも、トロイア方と戦さをはじめると、もう彼らは、ちょっとした間さえ、足の速いペーレウスの子(アキレウス)を支えることができないだろう。まったく、以前だって、彼の姿を見かけると、もうぶるぶるぶるぶるふるえていたくらいだから、今となって、親友の死に、恐ろしく憤激している場合は、城壁までも、定業^{さだめ}に超えて、破壊しつくしはすまいかと気遣うのだ
(呉 茂一 訳)

と言葉をしめくくって、他の神々に、望む方へと援助に向かうように促すのでした。

アキレウスは、トロイア落城を見る前に死ぬ運命でした。いかにお気に入りの英雄であっても、その運命を覆すことは許されません。アポローン神にしても、アキレウスの形相と能力から、同じように運命が定めるところのものが覆ることを恐れていたのではないのでしょうか。

6 アイネイアースの心境

アイネイアースはどうなのでしょう。恐らくリュカーオンに身を変じたアポローン神が彼に語りかけたときは、潰走していたのかもしれませんが。というのも

アイネイアースよ、トロイア方の指揮官であるきみが、以前に、酒宴の際、トロイア勢の大将たちに請け合った、あの大言はどうなったのかね、ペーレウスの子のアキレウスと、相對して一騎打ちをやってみせるなんて
(呉 茂一 訳)

とアイネイアースに言っているからです。意気盛んに前線へ向かっているのであれば、こういう言い方にはならないでしょう。

これに対してアイネイアースは最初に見たように

1. なんでそんなことを言うのか、と反論を始める
2. アキレウスに立ち向かうのは初めてというわけではない
3. 前の文章の動詞として $\sigma\tau\acute{\eta}\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ が現れる
4. 過去の対戦のことを思い出している
5. お互い条件が同じなら、一方的に負けるはずはないと言う

つまり $\sigma\tau\acute{\eta}\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ という動詞を引き金として、グッと過去の出来事のなかに入り込んでいきます。

このとき、アイネイアースのキャラクターとして、以下の二つの可能性があるように思えるのです。

- 大口をたたくが実行が伴わない人物
- まじめで祖国を愛する人物

6.1 大口をたたくキャラのアイネイアース

大口をたたくけれども実行が伴わないキャラクターである場合、 $\sigma\tau\acute{\eta}\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ 以降の過去の対戦の記憶は、今、アキレウスと戦おうとはしない言い訳なのでしょう。それでも大口をたたくクセが出るのか、最後には条件が同じならと言い訳をしめくくります。

$\sigma\tau\acute{\eta}\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ をどのように読めば、そういうキャラクターを感じることができるでしょう。

6.2 まじめで祖国を愛するアイネイアース

一方、まじめなタイプのアイネイアースであれば、 $\sigma\tau\acute{\eta}\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ 以降の過去の対戦の記憶は、身も凍る恐怖と戦慄の再体験を表しています。

とはいえ、アキレウスが自身の手でトロイアを陥落させてしまったら？ 自分の大切な人たちが、奴隷として連れ去られたり、殺されたりすることでしょう。

それをさせないためには？ 自分がアキレウスを止めることができるとしたら？ 条件が同じなら、というのはそういうことを指しているのではないのでしょうか。

$\sigma\tau\acute{\eta}\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ をどのように読めば、そういうキャラクターを感じることができるでしょう。

7 再び、アポローンの真意

アイネイアースが「条件が同じなら」と言った後、アポローン神は

勇士よ、ではさあきみも、永遠においでにの神々たちに祈りを捧げるがいい。きみだって、評判では、ゼウスの娘の、アプロディーテー女神から生まれたというのだから。あいつのほうが、位の下なる女神の子であるわけだ、きみの母親はゼウス神の御娘なのに、アキレウスのは、海の年寄(ネーレウス)の娘なんだもの。だからさあ、さっそくにも、けして壊れない青銅(の物の具)を持って来たまえ、けしてあいつに、手きびしい言葉とか威嚇^{おどかし}とかで、追っ払われてはならんぞ
(呉 茂一 訳)

と言ってアイネイアースを送り出すのでした。

このときのアポローン神の真意はどこにあったのでしょうか。単にアイネイアースを口車で丸め込むためのダメを押したのでしょうか。それとも、もっと違う何かがあったのでしょうか。

たとえば、アイネイアースの気持ちを受け止めて、神ご自身も応援するから、まず神々に祈り、心を決めて立ち向かうように促しているのかもしれない。

8 解釈の流れ

これらをまとめてみると

1. アイネイアースに語り掛けるアポローン神のスタンス
 - (a) ヘクトールが準備できるまでの「つなぎ」としてアイネイアースを指名
 - (b) 今、アキレウスにトロイアを落とさせまいとする強い意志からアイネイアースを指名
 - (c) もっと他の可能性
2. アイネイアース自身の対アキレウス戦に関する思い
 - (a) 大言壮語したものの、実のところ戦いたくない
 - (b) 過去の戦いを思い出して、再び強い恐怖に打ちひしがれている
 - (c) もっと他の可能性
3. 「同じ条件なら」アキレウスに簡単には負けないと言う動機
 - (a) 大言癖が出て、つい言ってしまった
 - (b) 今、トロイア落城を見ることがないように決意を固めた
 - (c) もっと他の可能性
4. それを見たアポローン神のスタンス
 - (a) とにかく言いくるめようとしている
 - (b) 決心を見届けた上で、送り出している
 - (c) もっと他の可能性

という可能性があるように見えます。組合せパターンだけでいうと、 $3 \times 3 \times 3 \times 3 = 81$ 通りありそうですが、恐らくはそれほど多くはないでしょう。だとすれば、どのような組み合わせが妥当なのでしょう。

そしてそれらを決定的に左右するのは90行目の動詞 $\sigma\tau\eta\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ の解釈にかかっているように見えるのですが、いかがでしょう。

9 そして再び στήσομαι

ずいぶん遠回りをしてしまいましたが、これでやっと στήσομαι について考える準備が整いました。それを順にみていきましょう。

9.1 直説法/未来としての στήσομαι

直説法/未来とした場合、στήσομαι という行為はアイネイアースにとってイメージがとても明瞭です。そのイメージが明瞭であるがゆえに、その前に「そんなコトを、今望んでもいない私に言うのか」と言っていることから、そうしたくないという意志を感じてしまうのです。

つまり私には「アキレウスに対して立ち向かうと言っても、今が初めてではないんだよねえ」と言って逃げ口上を打っているようなニュアンスに感じるのですが、皆さんはどう感じてらっしゃるでしょう。

9.2 接続法/アオリストとしての στήσομαι

接続法を一人称/単数で語っていますから、「思案・熟慮」のニュアンスを見ることが出来ます。また、アオリストを使うことで、その動作が一回的であろうことも。

ですから「もう一回だけ立ち向かうとして?前にあんな恐ろしい経験をしていてそれは...(過去の恐怖体験を追体験しだしている)」というニュアンスに感じられるのです。

酒宴ではアキレウスと一騎打ちでもと言ったのは、まだアキレウスと対戦したことがなかったときかもしれませんし、酒が気を大きくして大言を吐いてしまったのかもしれません。

10 まとめ

10.1 私の個人的な結論

私個人の結論としては、στήσομαι は接続法/アオリストだと思います。直説法/未来で読むよりも、アキレウスに対する恐れ、それでもトロイアを守ろうとする意志に結び付きやすいように感じるからです。

そして、動詞一つの解釈で、こんなにも大きく周辺の味わいが違ってくる—しかも、訳文だけ見てもそれを明確に区別できない—のは、原文を読んでこそその面白さだと感じるのです。

10.2 もっとも大切な、ご自身の結論を

これを読まれた方の中には、もっと違う解釈をして、違う結論を持つ方もいることでしょう。それでいいのです。

このワークが一番重視しているのは、ご自身が何を感じているのかをハッキリを感じ取っていただくことです。そして私と結論や解釈が異なるとしても、その結果を大事にしていただきたいのです。

なぜなら、それこそが、あなたにとって物語の真実だからです。少なくとも現時点では。もっと後になって違う解釈や理解の方が適切と感ずることがあるとしても、です。ただしそれは「学術的に正しい」ことを保証しません。

それを証明しようとするのであれば、もっと微に入り細に渡る、アカデミックな知識に基づく議論が必要です。そんな不毛に見える議論よりも、物語を楽しむ方がいい、と思うのです。

(了)